

第6章 総括

【乳幼児・小中学生・一般・高齢者調査共通項目】

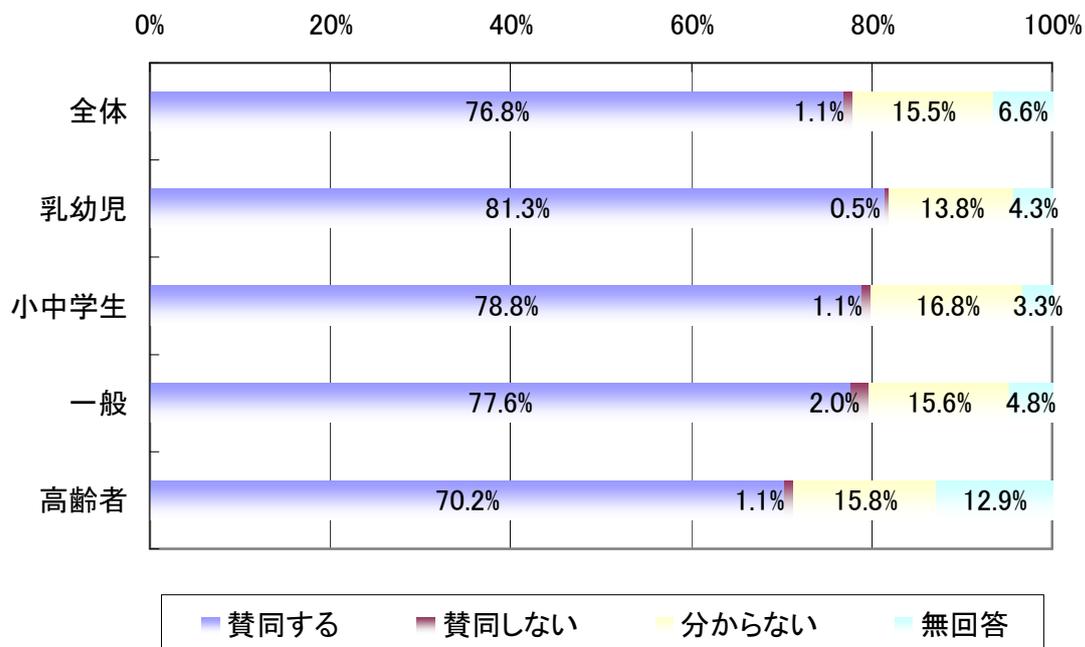
1 セーフコミュニティについて

セーフコミュニティの考え（事故やけがなどは偶然の結果ではなく、未然に防ぐことができるという理念に基づいた取組）への賛否については、乳幼児区分において「賛同する」割合が81.3%で最も高くなっている。

「賛同する」割合が最も低い高齢者区分でも70.2%となっている。

全体で見ると、「賛同する」割合は76.8%となり、4分の3以上が賛同するという結果となっており、事故やけがは未然に防止できるという理念に対する理解の高さがうかがわれる。

	全体		乳幼児		小中学生		一般		高齢者	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
賛同する	3,803	76.8%	1,070	81.3%	1,004	78.8%	732	77.6%	997	70.2%
賛同しない	56	1.1%	7	0.5%	14	1.1%	19	2.0%	16	1.1%
分からない	767	15.5%	182	13.8%	214	16.8%	147	15.6%	224	15.8%
無回答	327	6.6%	57	4.3%	42	3.3%	45	4.8%	183	12.9%
合計	4,953	100.0%	1,316	100.0%	1,274	100.0%	943	100.0%	1,420	100.0%



2 「事故やけが」の状況について

(1) 過去1年間（平成23年8月～平成24年7月）における事故やけがの経験、入院、通院、ヒヤリ体験の状況について

乳幼児、小中学生は、事故やけがの経験有が多く、また、通院やヒヤリ体験も多くなっている。

高齢者は、乳幼児に比べ事故やけがの経験有の人数は少ないが、入院の割合が高くなっている。

区分	回答数	事故やけがの経験有	入院	通院	ヒヤリ
乳幼児	1,316	394	3	149	667
小中学生	1,274	353	4	194	517
一般	943	132	4	73	161
高齢者	1,420	196	32	99	107
全体	4,953	1,075	43	515	1,452

※ 入院及び通院の人数は、「事故やけがの経験がある」と回答された人が、その事故やけがについて入院または通院と回答した実人数となっている。

(2) 本市の事故やけがの全体像の推計

上記(1)の調査結果と人口動態統計による死亡者数を組み合わせて、本市の事故やけがの全体像を推計すると下記のとおりとなる。

区分	人口	死亡実数	入院推計	通院推計	ヒヤリ推計
乳幼児	28,665	2	65	3,246	14,529
小中学生	57,585	3	181	8,769	23,368
一般	389,206	41	1,651	30,129	66,450
高齢者	129,664	109	2,922	9,040	9,770
全体	605,120	155	4,819	51,184	114,117

※ 各区分の人口は町丁別住民基本台帳人口（平成24年3月末現在）による

※ 人口は、乳幼児（0～4歳）、小中学生（5～14歳）、一般（15～64歳）、高齢者（65歳以上）

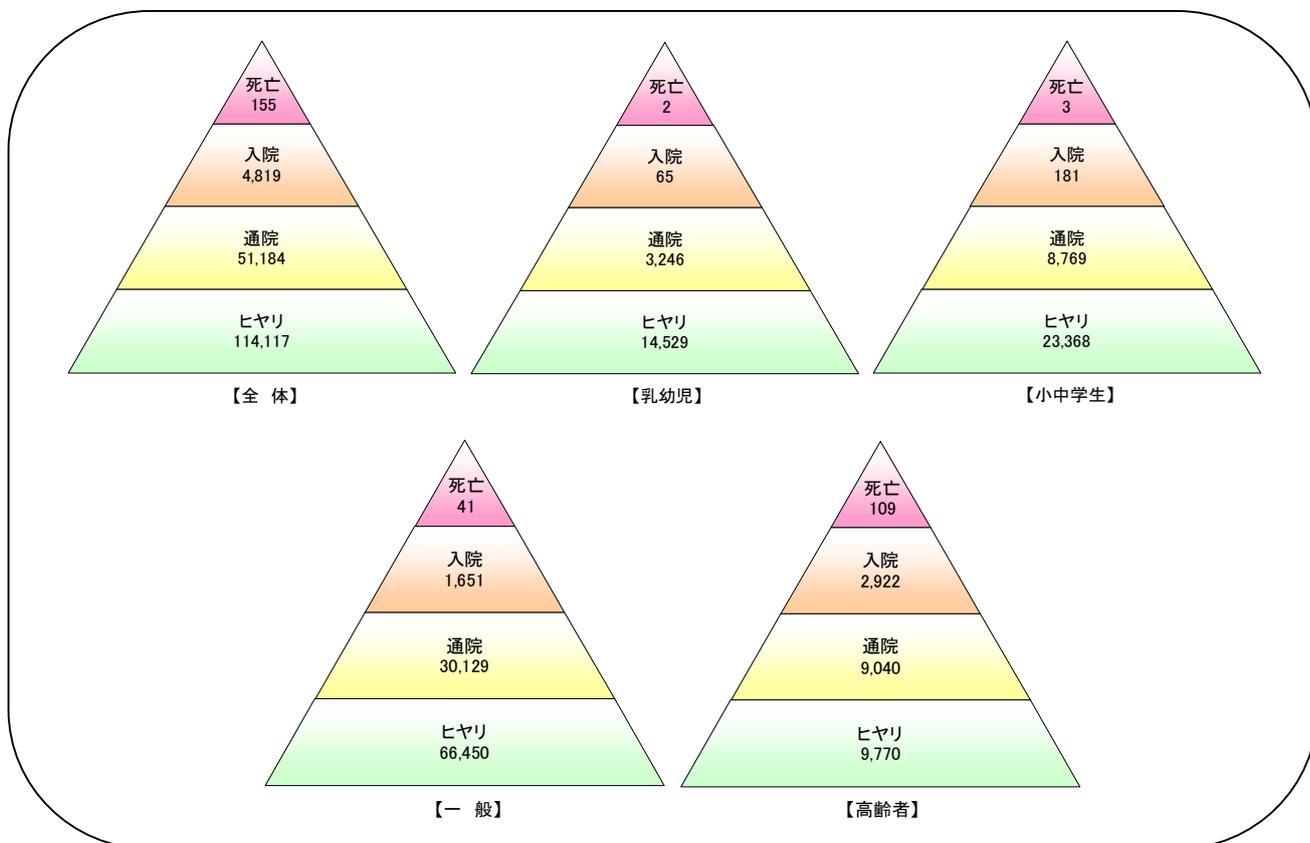
※ アンケート調査結果に基づく、本市の人口ベースでの推計値を算出する計算式については以下のとおり

〈例〉 乳幼児入院推計値の算出式

今回のアンケート調査（1,316人のうち、3人が入院）に基づき、本市における乳幼児（28,665人）の推計値を算出している。 $28,665 \times 3 / 1,316 \approx 65$

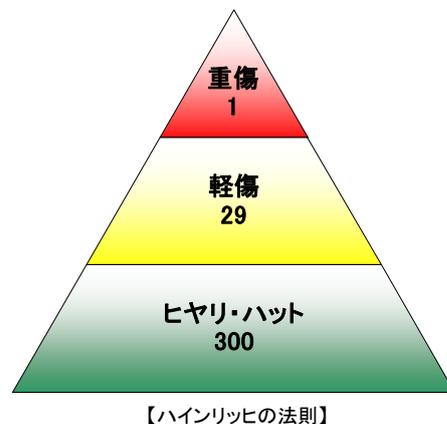
以下、乳幼児の通院、ヒヤリ、小中学生、一般、高齢者も上記同様に算出。全体については、乳幼児、小中学生、一般、高齢者のそれぞれの和

各区分の推計値を図化すると下記のとおりになり、死亡の背景には、重大事故に繋がる恐れのあるヒヤリ・ハットが多数存在していることがうかがわれる。



※ 参考 ハイน์リッヒの法則

- 労働災害における経験則の一つで、1つの重大事故の背後には29の軽微な事故があり、その背景には300のヒヤリ・ハットが存在するというもの。
- ハイน์リッヒが導き出した法則で、彼は、ある工場で発生した労働災害5,000件余を統計学的に調べ、計算し、「災害」について「1:29:300」という法則を導いた。「重傷」以上の事故が1件あったら、その背後には、29件の「軽傷」を伴う事故が起こり、300件もの「ヒヤリ・ハット」(危うく大惨事になる)傷害のない事故が起きていたということになる。
- 重大事故の防止のためには、事故や災害の発生が予測されたヒヤリ・ハットの段階で対処していくことが必要である。



※ 出典:Wikipedia

(3) 事故やけがの未然防止の可能性について

過去1年間（平成23年8月～平成24年7月）に経験した事故やけがを未然に防止できたとする回答の割合は、次のとおりである。

- ① 全回答の53.2%
- ② 事故やけがにより入院したと回答した人の37.2%
- ③ 事故やけがにより通院したと回答した人の48.7%

経験した事故やけがについて、半数を超える人が未然に防止できたと思っている。一方、入院と通院の経験者だけでみると、いずれも「防ぐことができた」と回答した割合は、半数を下回っている。

	「事故やけがの経験がある」と回答した件数	「事故やけがを防ぐことができた可能性」について回答した件数	左記のうち「防ぐことができた」と回答した件数	「防ぐことができた」と回答した割合	「入院した」と回答した件数	左記のうち「防ぐことができた」と回答した件数	「防ぐことができた」と回答した割合	「通院した」と回答した件数	左記のうち「防ぐことができた」と回答した件数	「防ぐことができた」と回答した割合
乳幼児	394	524	324	61.8%	3	1	33.3%	202	115	56.9%
小中学生	353	435	208	47.8%	4	2	50.0%	213	95	44.6%
一般	132	146	81	55.5%	4	1	25.0%	73	31	42.5%
高齢者	196	210	87	41.4%	32	12	37.5%	99	45	45.5%
全体	1,075	1,315	700	53.2%	43	16	37.2%	587	286	48.7%
	実件数 (人数)	延件数								

※ 延件数は、「事故やけがの経験がある」と回答された人が、その事故やけがについて2件まで回答できるよう設定したため、1件目と2件目の合計した数となっている。

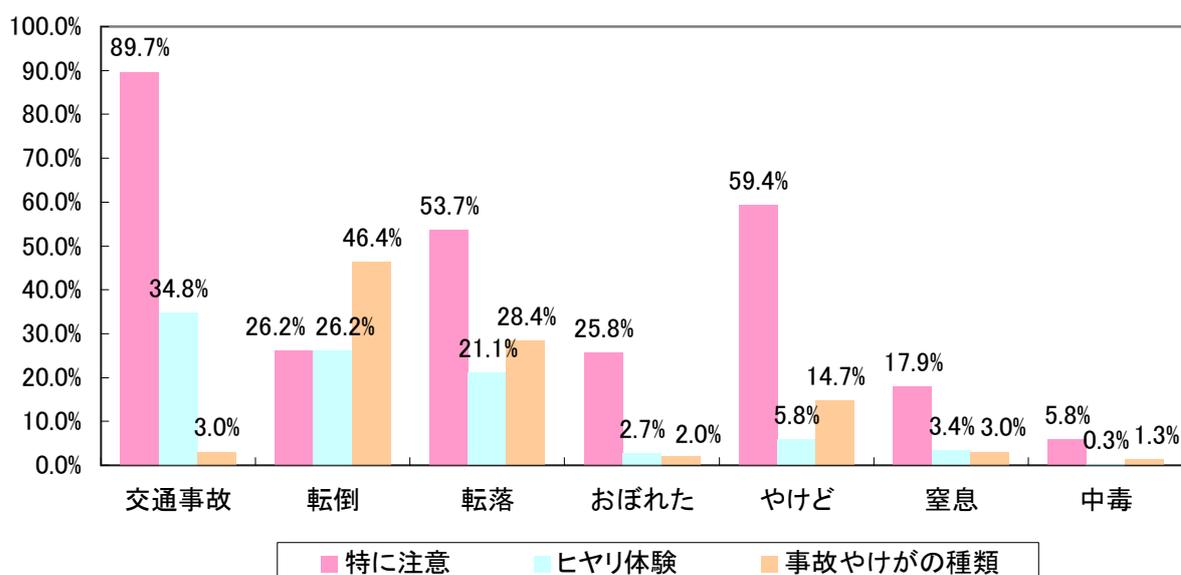
【乳幼児】

3 乳幼児の調査結果について

(1) 「特に注意している不慮の事故」・「一番多くヒヤリとした体験」・「経験した事故やけが」について (P14、P18、P23 参照)

- ・「特に注意している不慮の事故 (3つまで○)」については、約9割 (89.7%) が「交通事故」と回答している。
- ・「一番多くヒヤリとした体験 (ひとつに○)」については、約3人に1人 (34.8%) が「交通事故」、約4人に1人 (26.2%) が「転倒」、約5人に1人 (21.1%) が「転落」と回答している。
- ・「経験した事故やけがの種類 (1件目と2件目合計)」については、約半数 (46.4%) が「転倒」と回答している。

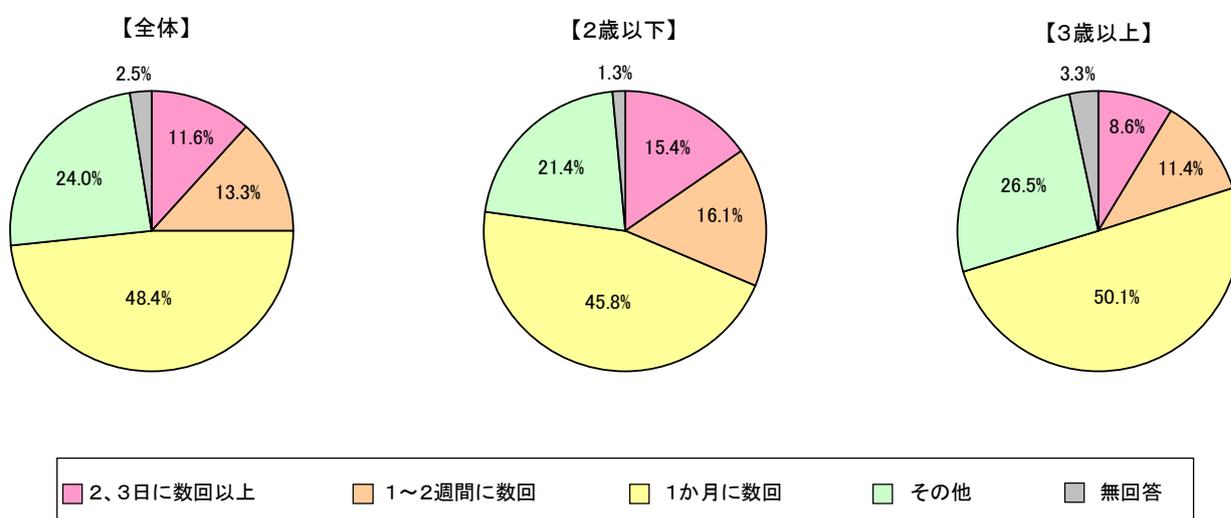
	特に注意している 不慮の事故	一番多く ヒヤリとした体験	経験した 事故やけがの種類
交通事故	89.7%	34.8%	3.0%
転倒	26.2%	26.2%	46.4%
転落	53.7%	21.1%	28.4%
おぼれた	25.8%	2.7%	2.0%
やけど	59.4%	5.8%	14.7%
窒息	17.9%	3.4%	3.0%
中毒	5.8%	0.3%	1.3%



(2) ヒヤリとした頻度について (P16 参照)

- ・ 1年間のヒヤリとした頻度を年齢別で比較すると、2歳以下の「2、3日に数回以上」と「1～2週間に数回」の割合が、どちらも3歳以上を上回っており、2歳以下のヒヤリとした頻度の高さがうかがわれる。

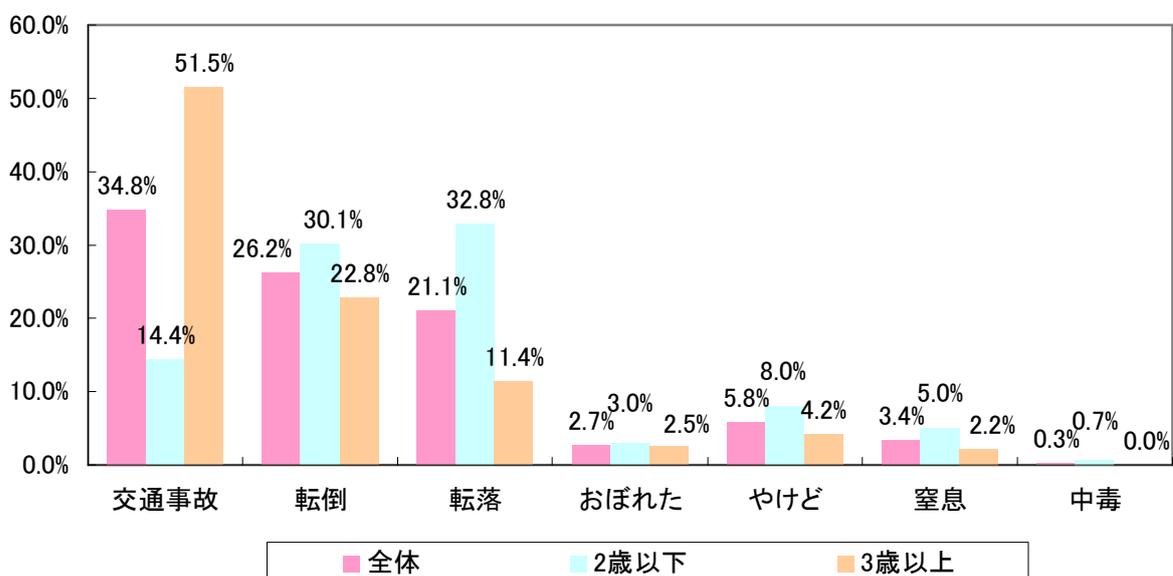
	全体	2歳以下	3歳以上
2、3日に数回以上	11.6%	15.4%	8.6%
1～2週間に数回	13.3%	16.1%	11.4%
1か月に数回	48.4%	45.8%	50.1%
その他	24.0%	21.4%	26.5%
無回答	2.5%	1.3%	3.3%



(3) 一番多くヒヤリとした体験について (P19 参照)

- ・「交通事故」については、約3人に1人 (34.8%) であるが、2歳以下では約7人に1人 (14.4%)、3歳以上では約2人に1人 (51.5%) となっている。
- ・「転倒」については、約4人に1人 (26.2%) であるが、2歳以下では約3人に1人 (30.1%)、3歳以上では約4人に1人 (22.8%) となっている。
- ・「転落」については、約5人に1人 (21.1%) であるが、2歳以下では約3人に1人 (32.8%)、3歳以上では約9人に1人 (11.4%) となっている。

	全体	2歳以下	3歳以上
交通事故	34.8%	14.4%	51.5%
転倒	26.2%	30.1%	22.8%
転落	21.1%	32.8%	11.4%
おぼれた	2.7%	3.0%	2.5%
やけど	5.8%	8.0%	4.2%
窒息	3.4%	5.0%	2.2%
中毒	0.3%	0.7%	0.0%



(4) 事故やけがの状況について (P20～P27 参照)

- ・ 1年間の事故やけがの経験については、約3割(29.9%)が「ある」と回答している。
- ・ 事故やけがをした場所については、約6割(59.1%)が「自宅(屋内)」と回答している。年齢別では、2歳以下も同じく約8割(80.7%)が「自宅(屋内)」と回答しているが、3歳以上では約4割(38.8%)が「自宅(屋内)」と回答している。また、3歳以上では「保育所・幼稚園・その他通園施設」は27.3%と、2歳以下の4.4%に比べて高くなっている。子どもが成長するにつれ行動範囲も広がるため、事故やけがをする場所が自宅(屋内)から屋外へ移行していると推測される。
- ・ 医療機関の受診については、全体、性別、年齢別ともに「家庭などの手当てで済んだ」が最も多くなっている。年齢別では3歳以上の「医療機関に2回以上通院した(している)」が36.4%となっており、2歳以下の14.9%に比べて高くなっている。
- ・ 未然に防ぐことができた可能性については、全体、性別、年齢別ともに約8割が「防ぐことができた」と回答している。

(5) 事故やけがの予防に関する情報源及び情報をより充実して欲しいもの (P32、P33 参照)

- ・ 情報源としては、「家族・親戚」の61.0%、「友人・知人」の52.8%と半数以上の方が選択している。また、約2人に1人(46.0%)が「保育園・幼稚園」を選択している。
- ・ 情報をより充実して欲しいものは、「保育園・幼稚園」が41.9%と最も多く、次いで「テレビ・ラジオ」が28.8%、「病院」が26.4%となっている。
- ・ 約5人に1人(22.9%)が「無回答」であり、事故やけがの予防に関する情報源として「家族・親戚」又は「友人・知人」の存在が大きいことが1つの要因ではないかと考えられる。

(6) 子どもの安全対策について (P34 参照)

- ・子どもの年齢等により、安全対策の内容は違うと考えられるが、割合ごとに分けると以下のようなになる。

80%以上	50%以上 80%未満	50%未満
道路を歩行する際、手つなぎやだっこをする	浴槽の水は残さないようにしている	たばこを放置しない
ライター、刃物など危ないものは、子どもの手の届かないところに置いている	かかりつけの医療機関や緊急時の連絡先が分かるようにしている	トイレの中に落ちないようにする子ども用の便座やふたをしている
車に乗る際にチャイルドシートを使用する	ベランダから身をのりださないように台座などは置かないようにしている	たんす、食器棚、冷蔵庫の扉が開かないように安全グッズを設置している
		よく体をぶつけてしまう家具などの角にカバーをしている
		階段に転落防止柵を設置している(昇らないような防止柵も含む)
		自転車に乗る際にヘルメットを着用させる
		窓や扉から飛び出さないように安全グッズを設置している
		ドアやとびらに手を挟まないように安全グッズを設置している
		浴槽ですべって溺れないようにすべり止めを設置している
		ベッドに転落防止柵を設置している

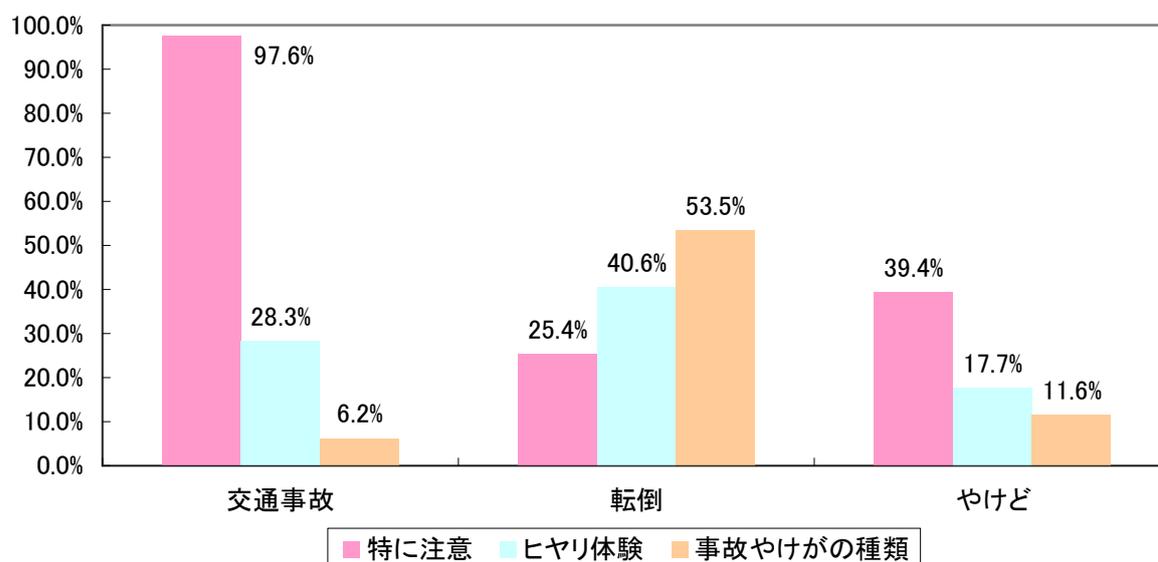
【小中学生】

4 小中学生の調査結果について

(1) 「特に注意している不慮の事故」・「ヒヤリとした体験」・「経験した事故やけが」について
(P51、P52、P56、P58、P65 参照)

- ・「特に注意している不慮の事故(3つまで)」については、ほぼ全員に近い97.6%が「交通事故」と回答しており、交通事故に対する関心が高いことがうかがえる。
- ・「ヒヤリとした体験(ひとつに〇)」については、約4割(40.6%)が「転倒」、約3割(28.3%)が「交通事故」、約2割(17.7%)が「やけど」と回答している。
- ・「経験した事故やけがの種類(1件目と2件目合計)」については、半数以上(53.5%)が「転倒」と回答している。

	特に注意している 不慮の事故	ヒヤリとした体験	経験した 事故やけがの種類
交通事故	97.6%	28.3%	6.2%
転倒	25.4%	40.6%	53.5%
やけど	39.4%	17.7%	11.6%



(2) ヒヤリとした体験について (P52～P59 参照)

①交通事故

- ・交通事故に遭いそうになりヒヤリとしたことについては、約3割 (28.3%) が「ある」と回答している。学年別では、小学校低学年の約3人に1人 (33.3%)、小学校高学年並びに中学生の約4人に1人 (それぞれ25.8%、26.0%) が「ある」と回答している。
- ・交通事故に遭いそうになりヒヤリとしたことが「ある」と回答したうち54.0%が「歩行中」と回答している。学年別では、小学校低学年の71.2%、小学校高学年の47.8%、中学生の38.9%が「歩行中」と回答している。また、小学校高学年の36.3%、中学生の44.4%が「自転車に乗っているとき」と回答している。
- ・交通事故に遭いそうになりヒヤリとしたことが「ある」と回答した半数以上 (全体の54.8%、小学校低学年の56.1%、小学校高学年の54.0%、中学生の54.6%) が「車・バイクにぶつかりそうになった」と回答している。

②転倒

- ・転倒しそうになりヒヤリとしたことについては、約4割 (40.6%) が「ある」と回答しており、その原因については、約半数 (49.7%) が「段差、ものに足をひっかけた」と回答している。
- ・学年別でみると、小学校低学年の48.6%、小学校高学年の40.0%、中学校の33.3%が「ある」と回答しており、その原因で最も多かったのは、どの学年も「段差、ものに足をひっかけた」で、小学校低学年が50.7%、小学校高学年が47.4%、中学校が51.4%となっている。

③やけど

- ・やけどしそうになりヒヤリとしたことについては、約2割 (17.7%) が「ある」と回答しており、その原因については、約4人に1人 (26.7%) が「やかん・ポット」と回答している。
- ・学年別では、小学校低学年の20.1%、小学校高学年の20.3%、中学生の12.3%が「ある」と回答しており、その原因で最も多かったのは、小学校低学年の26.2%が「花火」、小学校高学年の28.1%、中学生の31.4%が「やかん・ポット」と回答している。
- ・その他、「アイロン」、「料理中 (の手伝い)」などが挙げられており、身近なところにやけどの原因となるさまざまなものが存在していることが分かる。

(3) 事故やけがの状況について (P60～P70 参照)

- ・ 1年間の事故やけがの経験については、約4人に1人(27.7%)が「ある」と回答している。
- ・ 事故やけがをした場所については、約半数(45.3%)が「学校」と回答している。学年別では、小学校低学年の35.0%、小学校高学年の41.8%、中学生の61.1%が「学校」と回答している。
- ・ 事故やけがの種類については、半数以上(53.5%)が「転倒」と回答している。学年別では、小学校低学年の59.3%、小学校高学年の59.0%、中学生の40.7%が「転倒」と回答している。
- ・ けがの状態については、約半数(47.6%)が「きり傷・さし傷・すり傷」と回答している。学年別では、小学校低学年の61.0%、小学校高学年の48.4%、中学生の31.5%が「きり傷・さし傷・すり傷」と回答している。
- ・ 医療機関の受診については、約6割(57.8%)が「家庭や学校などの手当てで済んだ」と回答している。学年別では、小学校低学年の69.1%、小学校高学年の59.0%が「家庭や学校などの手当てで済んだ」と回答している。また、中学生の49.1%が「医療機関に2回以上通院した(している)」と回答している。
- ・ 事故やけがを未然に防ぐことができた可能性については、約6割(58.9%)が「防ぐことができた」と回答している。学年別では、小学校低学年の69.1%、小学校高学年の61.5%、中学生の44.4%が「防ぐことができた」と回答している。

(4) 自転車について (P74～P76 参照)

- ・ 約7割(68.9%)が自転車に乗っていると回答しており、そのうち約2割(18.8%)はヘルメットを「いつも着けている」、約6割(61.8%)は「着けていない」または「ヘルメットをもっていない」と回答している。
- ・ 学年別では、小学校低学年と中学生の約4割(それぞれ38.0%、44.1%)が「ヘルメットをもっていない」と回答している。
- ・ 半数以上(全体の54.2%、小学校低学年の51.7%、小学校高学年の56.2%、中学生の53.8%)が自転車に乗る際、「ルールを守っている」と回答している。

(5) 子ども110番の家の認知度 (P77 参照)

- ・ 約6割(59.7%)が子ども110番の家を「知っている」と回答している。学年別では、小学校高学年の約7割(69.2%)%が「知っている」と回答しているが、小学校低学年では半数以下(48.8%)となっている。

(6) いかのおすしの認知度 (P78 参照)

- ・ 約9割(90.1%)がいかのおすしを「知っている」と回答している。

(7) 子どもの安全対策について (P79 参照)

- ・ほとんどの項目で半数以上の方が注意喚起を図っている。
- ・子どもの年齢等により、安全対策の内容は違うと考えられるが、割合ごとに分けると以下のようなになる。

80%以上	50%以上 80%未満	50%未満
道路に飛び出さないよう注意している	暗い道をひとりで歩かないようにさせている	自転車に乗る際には、ヘルメットをかぶらせている
友だちと仲良くするように教えている	はさみなどの道具の正しい使い方を教えている	
学校の様子を聞くようにしている	水の事故について教えている	
交通ルールを教えている	ブランコや滑り台、鉄棒などの遊具の遊び方を教えている	
マッチやライターで火遊びをしないよう注意している		
車に乗る際には、シートベルトを着用するよう注意している		

【一般】

5 一般の調査結果について

(1) 事故やけがの経験について (P93 参照)

- ・ 1年間の事故やけがの経験については、「ある」が 14.0%、「ないが、事故やけがに遭いそうになりヒヤリとしたことがある」が 17.1%となっている。

(2) 事故やけがの状況について (P94～P100 参照)

- ・ 事故やけがをした時期については、約 4割 (39.4%) が「平成 24 年 5 月～7 月」と回答している。
- ・ 事故やけがをした時間については、約 5割 (45.5%) が「12 時～18 時」、約 3割 (30.3%) が「6 時～12 時」と回答している。
- ・ 事故やけがをしたときの天気については、約 4人に 3人 (74.2%) が「晴」と回答している。
- ・ 事故やけがをしたときの状況については、「家事 (日常品の買い物を含む)」が 27.3%と最も多く、次いで「仕事」が 21.2%、「通勤」が 14.4%となっている。
- ・ 事故やけがをした場所については、約 3人に 1人 (33.3%) が「歩道・道路」、約 4人に 1人 (22.7%) が「自宅 (屋内)」と回答している。
- ・ 事故やけがの種類については、「転倒」が 31.8%と最も多く、次いで「交通事故」が 27.3%、「やけど (熱湯、アイロンなど)」が 12.9%となっている。
- ・ けがの状況については、「打撲・うちみ」が 30.3%と最も多く、次いで「切り傷・刺し傷・すり傷」が 16.7%、「ねんざ・脱臼・突き指」が 14.4%となっている。
- ・ 医療機関の受診については、「医療機関に 2 回以上通院した (している)」が 37.9%と最も多く、次いで「家庭・学校・職場などの手当てで済んだ」が 37.1%、「医療機関に 1 回通院した」が 17.4%となっている。
- ・ 未然に防ぐことができた可能性については、約 6割 (61.4%) が「防ぐことができた」と回答している。

(3) 家庭の安全対策の実践状況について (P103 参照)

・家庭の安全対策の実践状況を割合ごとに分けると以下のようになる。

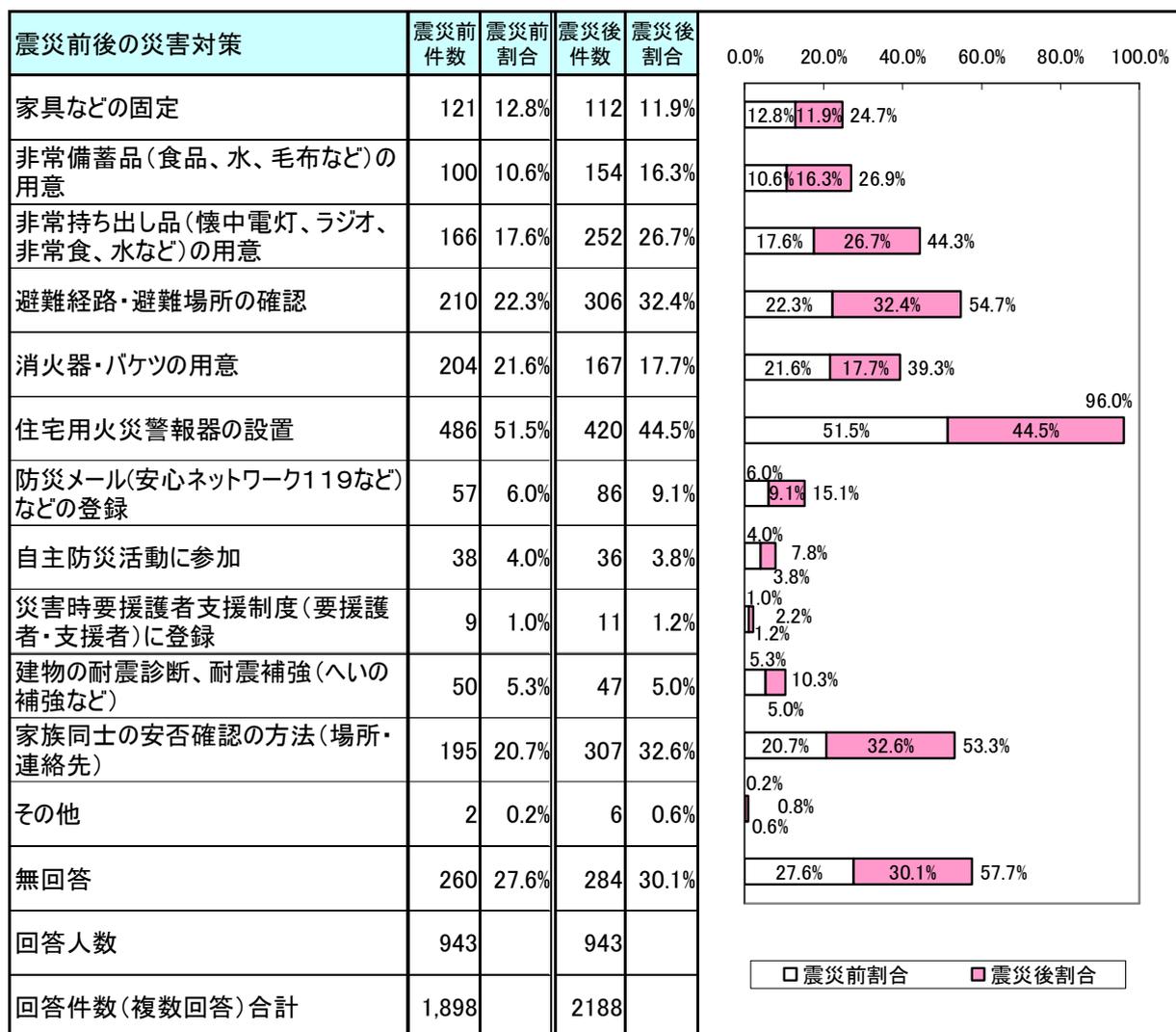
80%以上	50%以上 80%未満	50%未満
就寝・外出時には戸締まりをする	洗剤や薬などは指定の容器に入れて保管している	浴室の使用後は、水気が残らないように乾燥させている
薬は正しく服用している	階段や玄関の周りには、転倒や落下の危険性がある物を置かない	コンセントにはたこ足配線をしていない
濡れた手でコンセントや電気コードを触らない	ガスの使用後には元栓などを閉めたか確認する	階段や廊下、浴室などに手すりを設置している
危険な道具(はさみ、カッターなど)は決まった場所に置いている	すべりやすいスリッパなどは履かないようにしている	床に物を置いたままにしない
		室内や廊下などで段差解消をしている
		階段にすべり止めを設置している

(4) 「わが家の安心安全ガイドブック」について (P105、P106 参照)

- ・わが家の安心安全ガイドブックの認知度については、「知っている」が 45.4%と半数を下回っている。
- ・性別では、男の6割以上(61.2%)が「知らない」と回答している。一方、女の5割以上(53.3%)が「知っている」と回答しており、「知らない」を上回っている。
- ・年齢別では、40歳未満の6割以上(65.7%)が「知らない」と回答している。一方、40歳～64歳の5割以上(51.4%)が「知っている」と回答しており、「知らない」を上回っている。
- ・ガイドブックの活用については、半数以上(53.5%)が「活用している」または「見てはいないが、すぐ確認できるところに保管している」と回答している。一方、約4割(39.7%)が「配付されたのは知っているが、見ていない」または「活用していない」と回答している。

(5) 震災前後の災害対策 (P107~P109 参照)

- ・家庭での災害対策としては、設置が義務づけられた「住宅用火災警報器の設置」が震災前・後を通じて一番多くなっている。その他の災害対策については、「避難経路・避難場所の確認」や「家族同士の安否確認の方法(場所・連絡先)」が多くなっている。また、「防災メール(安心ネットワーク119など)などの登録」や「自主防災活動に参加」などについては、取組みの割合が低くなっている。



(6) 交通安全について (P111~P114 参照)

- ・最も利用する移動手段については、約7割(68.4%)が「自動車」と回答している。
- ・自動車の運転の際に実行していることについては、全ての項目(「信号、一旦停止などの交通ルールを守る」(96.1%)、「全員のシートベルト着用(チャイルドシートを含む)を確認する」(73.2%)、「運転中は、カーナビ・携帯電話などの操作は行わない」(63.9%)、「車内は整理整頓し、不要なものを置かない」(61.7%))で6割以上となっている。

(7) 犯罪・暴力について (P117~P122 参照)

- ・犯罪による事故やけがの経験については、「身体的なけがを受けた」が2.1%、「精神的苦痛を受けた」が1.9%となっている。
- ・配偶者や交際相手から身体に対する暴力を受けた経験については、8.7%(「1・2度あった」(6.7%)、「何度もあった」(2.0%))が「あった」と回答している。
- ・配偶者や交際相手から精神的苦痛を受けた経験については、7.5%(「1・2度あった」(4.8%)、「何度もあった」(2.7%))が「あった」と回答している。
- ・配偶者や交際相手から性的行為の強要等の経験については、3.6%(「1・2度あった」(1.9%)、「何度もあった」(1.7%))が「あった」と回答している。
- ・配偶者や交際相手から相手から受けた暴力によって命の危険を感じたことがあるかについては、約2割(17.6%)が「ある」と回答している。
- ・家族からの虐待だったかもしれないと思う行為を受けた経験については、「ある」が3.9%、家族への虐待だったかもしれないと思う行為をした経験については、「ある」が5.0%となっている。

(8) 自殺について (P123~P128 参照)

- ・自殺したいと思った経験については、約4人に1人(24.2%)が「思ったことがある」と回答している。
- ・自殺したいと思った一番の原因については、約3人に1人(32.0%)が「家庭問題」と回答している。
- ・自殺したいと思ったときの相談先については、約6割(60.5%)が「相談していない」と回答している。
- ・自殺に関する相談先の認知度については、約6割(56.9%)が「知らない」と回答している。
- ・自殺について知っていることについては、「自殺は防ぐことができる」が66.3%と最も多く、次いで「身近な人のうつ病のサインに気づいたとき、医療機関へ相談を勧めることは大切である」が63.3%となっている。一方「鹿児島市では毎年約100人の方が自殺で亡くなっている」が3.8%で、ほとんど知られていない結果となっている。

【高齢者】

6 高齢者の調査結果について

(1) 事故やけがの経験 (P139 参照)

- ・ 1年間の事故やけがの経験については、「ある」が13.8%、「ないが、事故やけがに遭いそうになりヒヤリとしたことがある」が7.5%となっている。

(2) 事故やけがの状況 (P140~P146 参照)

- ・ 事故やけがをした時期については、「平成24年2月~4月」と「平成24年5月~7月」が26.5%と最も多くなっている。
- ・ 事故やけがをした時間については、約4割(39.8%)が「12時~18時」、約3割(31.1%)が「6時~12時」と回答している。
- ・ 事故やけがをしたときの天気については、約半数(49.5%)が「晴」、約2割(19.9%)が「曇」と回答している。
- ・ 事故やけがをしたときの状況については、「家事(日常品の買い物を含む)」が27.0%と最も多く、次いで「散歩」が13.3%、「仕事」が7.7%となっている。
- ・ 事故やけがをした場所については、約3人に1人(35.7%)が「自宅(屋内)」、4人に1人(24.0%)が「歩道・道路」と回答している。
- ・ 事故やけがの種類については、約5割(53.1%)が「転倒」と回答している。
- ・ けがの状況については、「打撲・うちみ」が30.6%と最も多く、次いで「骨折・ひび」が26.0%、「切り傷・刺し傷・すり傷」が10.7%となっている。
- ・ 医療機関の受診については、「医療機関に2回以上通院した(している)」が40.3%と最も多く、次いで「家庭・職場などの手当てで済んだ」が21.4%、「医療機関に入院した(している)」が16.3%となっている。
- ・ 未然に防ぐことができた可能性については、約4割(44.4%)が「防ぐことができた」と回答している。

(3) 家庭の安全対策の実践状況 (P149 参照)

・家庭の安全対策の実践状況を割合ごとに分類すると以下のようになる。

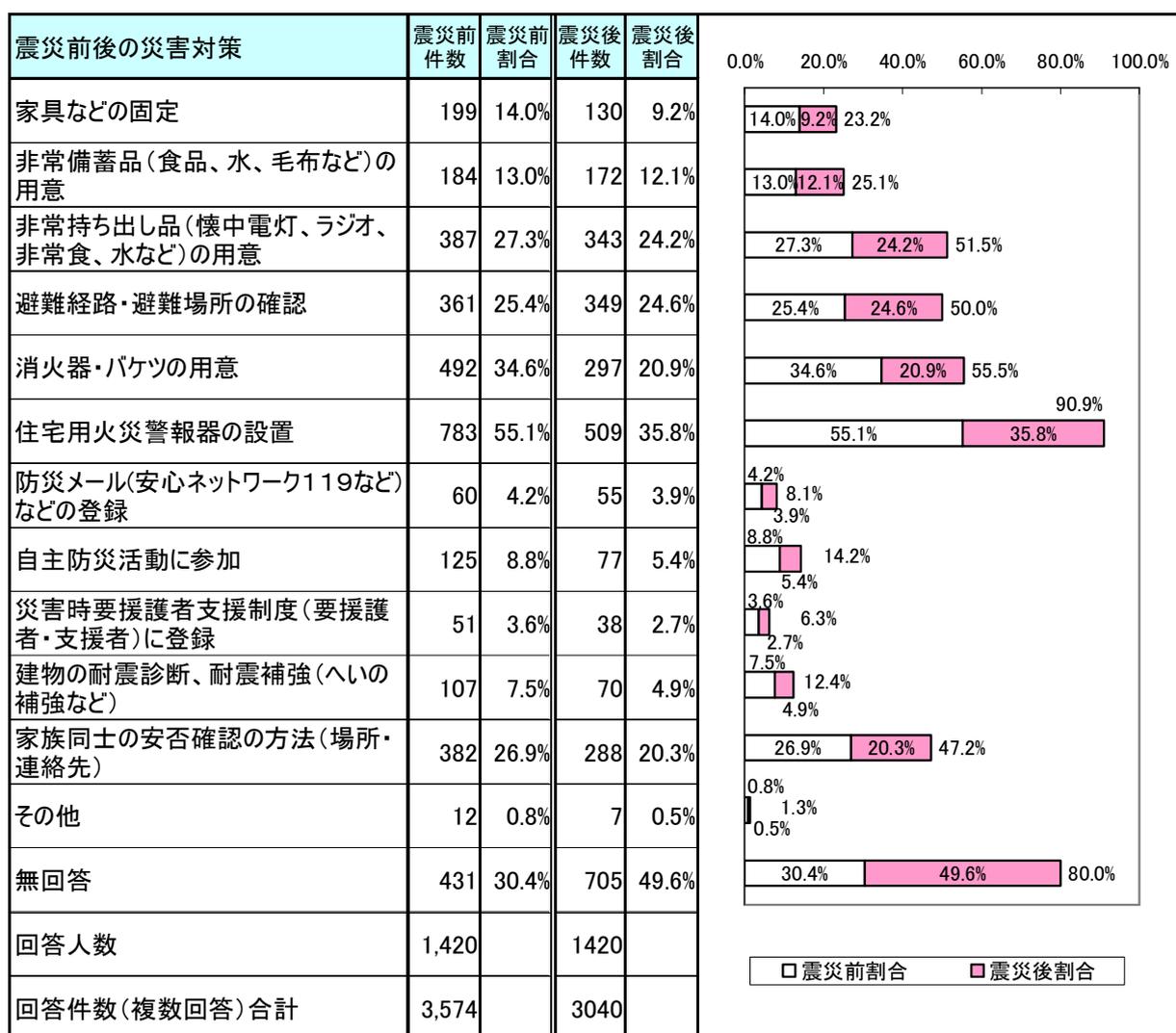
80%以上	50%以上 80%未満	50%未満
就寝・外出時には戸締まりをする	濡れた手でコンセントや電気コードを触らない	階段や廊下、浴室などに手すりを設置している
薬は正しく服用している	洗剤や薬などは指定の容器に入れて保管している	室内や廊下などで段差解消をしている
危険な道具(はさみ、カッターなど)は決まった場所に置いている	階段や玄関の周りには、転倒や落下の危険性がある物を置かない	階段にすべり止めを設置している
	すべりやすいスリッパなどは履かないようにしている	
	ガスの使用後には元栓などを閉めたか確認する	
	コンセントにはたこ足配線をしていない	
	浴室の使用後は、水気が残らないように乾燥させている	
	床に物を置いたままにしない	

(4) 「わが家の安心安全ガイドブック」(P151～P152 参照)

- ・わが家の安心安全ガイドブックの認知度については、約5割(54.9%)が「知っている」と回答している。
- ・性別、年齢別ともに、半数以上(男(54.5%)、女(56.0%)、65歳～74歳(57.9%)、75歳以上(52.1%))が「知っている」と回答している。
- ・ガイドブックの活用については、約3人に2人(66.2%)が「活用している」または「見てはいないが、すぐ確認できるところに保管している」と回答している。一方、約3割(28.2%)が「配布されたのは知っているが、見ていない」または「活用していない」と回答している。

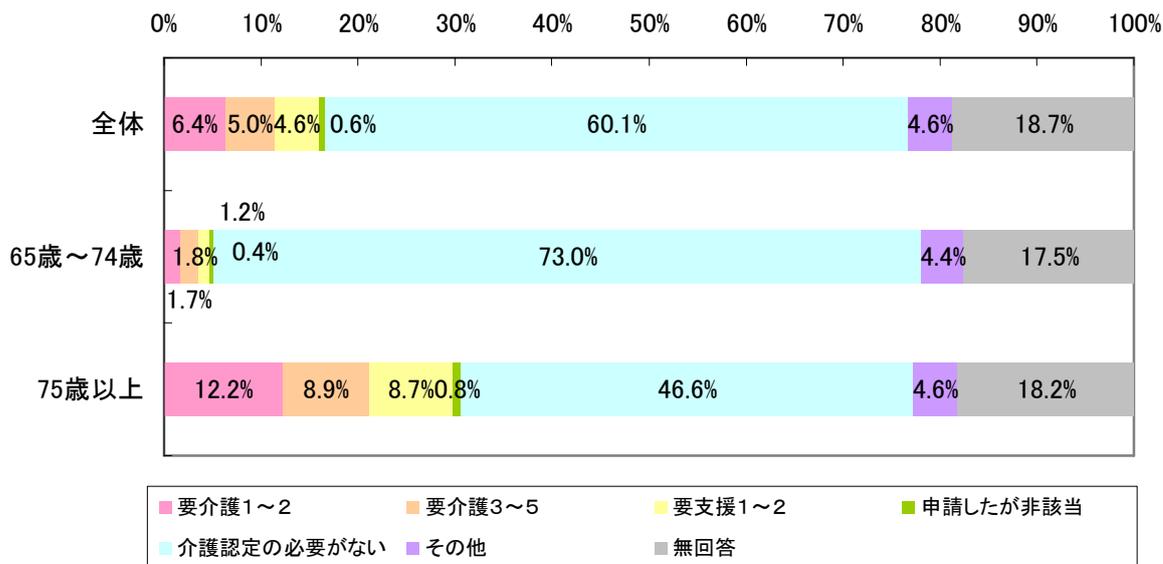
(5) 震災前後の災害対策 (P153~P155 参照)

- ・家庭での災害対策としては、設置が義務づけられた「住宅用火災警報器の設置」が震災前・後を通じて一番多くなっている。その他の災害対策については、「避難経路・避難場所の確認」や「非常持ち出し品（懐中電灯、ラジオ、非常食、水など）の用意」が多くなっている。また、「防災メール（安心ネットワーク119など）などの登録」や「自主防災活動に参加」などについては、取組みの割合が低くなっている。



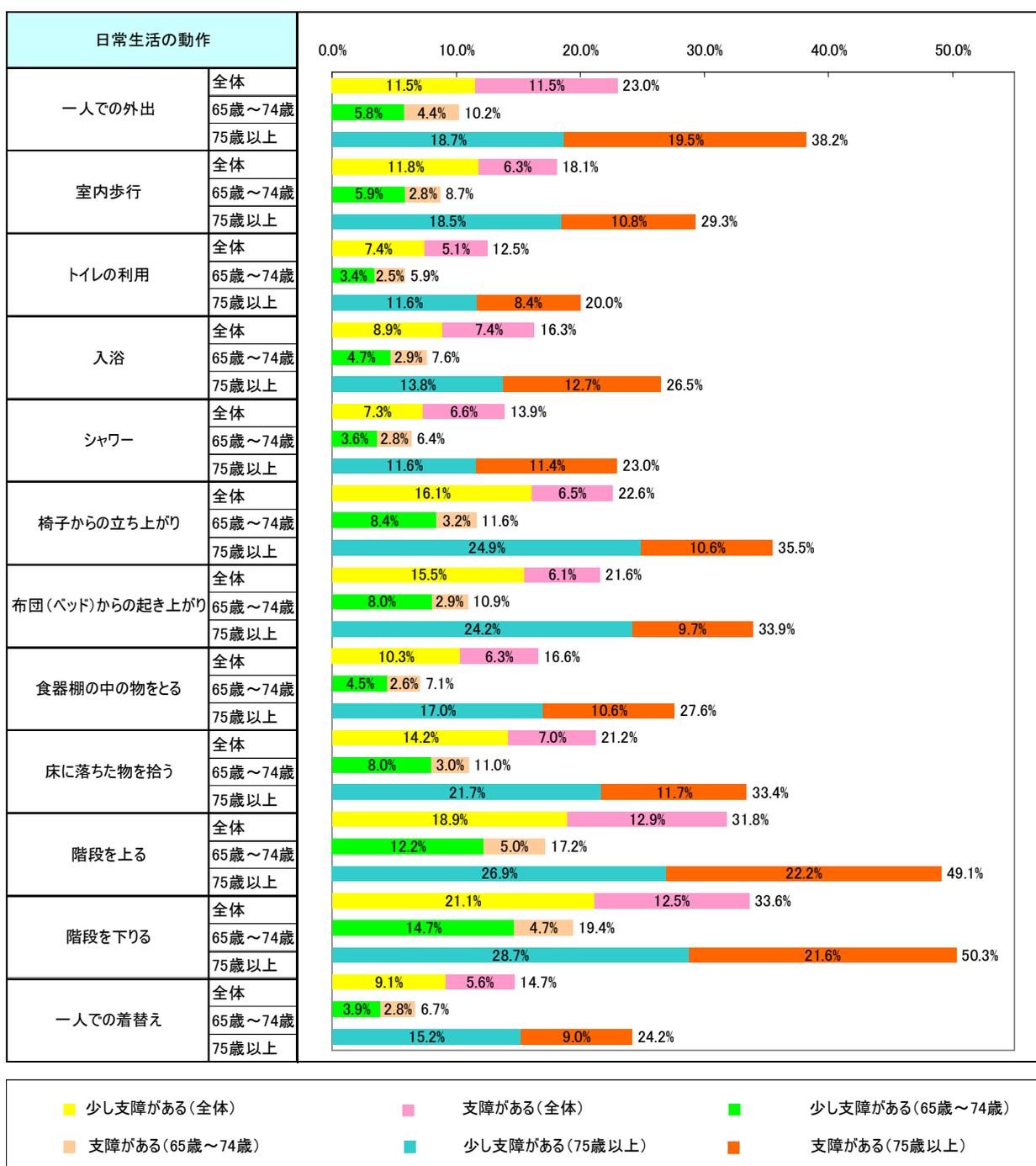
(6) 介護認定の状況 (P157~P158 参照)

- ・介護保険については、16.0% (「要介護1~2」(6.4%)、「要介護3~5」(5.0%)、「要支援1~2」(4.6%)) が要介護または要支援の認定を受けている。
- ・年齢別にみると、75歳以上で「要介護1~2」(12.2%)、「要介護3~5」(8.9%)、「要支援1~2」(8.7%) の合計が約3割 (29.8%) となっており、65歳~74歳の合計4.7%に比べ高くなっている。



(7) 日常生活の動作状況 (P159~P170 参照)

- ・ 日常生活の動作の状況を全体、65歳～74歳、75歳以上で割合ごとに分けると以下ようになる。
- ・ 年齢別にみると、全ての動作で75歳以上の「少し支障がある」と「支障がある」の合計の割合が全体の合計の割合に比べて高くなっている。また、階段を上ることや階段を下りることについて75歳以上の「少し支障がある」と「支障がある」の合計の割合が約半数（それぞれ49.1%、50.3%）となっている。



(8) 反射材の活用 (P171 参照)

- ・「活用していない」と「持ってない」の合計が 45.8%で、「活用している」と「たまに活用している」の合計 43.6%を上回っている。

(9) 転倒について (P172~P176 参照)

- ・転倒の経験については、約 5 人に 1 人 (19.8%) が「ある」または「危うく転倒するところだった」と回答している。
- ・転倒に対する不安感については、約 4 割 (41.8%) が「とても不安を感じる」または「やや不安を感じる」と回答している。
- ・運動不足が転倒 (または危うく転倒しそうになる) 原因と思うかについては、約 6 割 (61.9%) が「ある」と回答している。

(10) 犯罪・暴力について (P179~P184 参照)

- ・犯罪による事故やけがの経験については、「精神的苦痛を受けた」が 1.5%、「身体的なけがを受けた」が 0.6%、となっている。
- ・配偶者や交際相手から身体に対する暴力を受けた経験については、2.7% (「1・2 度あった」(1.3%)、「何度もあった」(1.4%)) が「あった」と回答している。
- ・配偶者や交際相手から精神的苦痛を受けた経験については、3.2% (「1・2 度あった」(1.9%)、「何どもあった」(1.3%)) が「あった」と回答している。
- ・配偶者や交際相手から性的行為の強要等の経験については、1.0% (「1・2 度あった」(0.4%)、「何どもあった」(0.6%)) が「あった」と回答している。
- ・配偶者や交際相手から相手から受けた暴力によって命の危険を感じたことがあるかについては、約 3 割 (30.3%) が「ある」と回答している。
- ・家族からの虐待だったかもしれないと思う行為を受けた経験については、「ある」が 2.0%、家族への虐待だったかもしれないと思う行為をした経験については、「ある」が 2.5%となっている。

(11) 自殺について (P185~P190 参照)

- 自殺したいと思った経験については、約1割(9.8%)が「思ったことがある」と回答している。
- 自殺したいと思った一番の原因については、約3人に1人(33.1%)が「健康問題」と回答している。
- 自殺したいと思ったときの相談先については、約6割(62.6%)が「相談していない」と回答している。
- 自殺に関する相談先の認知度については、約6割(57.0%)が「知らない」と回答している。
- 自殺について知っていることについては、「自殺は防ぐことができる」が48.5%と最も多く、次いで「身近な人のうつ病のサインに気づいたとき、医療機関へ相談を勧めることは大切である」が43.1%となっている。一方「鹿児島市では毎年約100人の方が自殺で亡くなっている」が6.5%で、ほとんど知られていない結果となっている。